

〈則法革命〉 〈複合史観〉、今度は〈資本主義克服社会〉

西川伸一

表紙に「『日本のサンダース』が解き明かす／ソ連邦崩壊の意味／マルクス主義の責任／そして社会主義」とある。本書の内容はこれら三点に要約できよう。

二〇一六年のアメリカ大統領選の民主党候補者指名をヒラリー・クリントンと争ったバーニー・サンダースは一九四一年生まれで、著者は四三年生まれである。両者は同時代人といってよい。サンダースは社会主義者を自称している。著者も若いころから「〈社会主義〉を志向してきた」根っからの社会主義者だ。さて、「日本のサンダース」は上述の三つの課題をどう解き明かすのか。

まず、ソ連邦崩壊の意味である。七〇年ほどのソ連邦の歴史は〈経済改革の連続〉であったと著者はとらえる。しかし、改革では手当不可能なほどに経済が行き詰まり、ソ連邦は崩壊した。生産資材の凍結、駆け込み生産、価格体系の恣意性などの不合理な要素を抜本的に改めることができず、その経済的不整合は国家それ自体の存続を不可能にした。著者によれば、ソ連邦は共産党の指導・嚮導による指令経済社会、すなわち〈党主指令社会〉であった。その崩壊の意味は、党主政ではなく民主政が、指令経済ではなく協議経済が、〈資本主義克服社会〉の運営原則になるということである。とりわけ、前者はすでに決着がついている。万人の自由が法的に保障されたことで、「階級国家」論は存在理由を失った。

この〈資本主義克服社会〉とは著者による創語である。〈社会主義〉とはなにかで敵意に満ちた論争を繰り返すよりも、よほど生産的だろう。「こうして、私たちはマルクスやマルクス主義の限界を超えて、広く討論・議論する共通の場を創り出すことができる。その際、著者がマルクス主義の責任として戒めているのは次の三点である。①独善的傾向を、さらにはそこから派生する「弁証法的思考」なるジャーゴンを克服すること。「独りよがりの高慢な上から目線ではとても共感を生み出すことはできない」。②「一発逆転」的願望を放棄すること。「『歴史の必然性』というのも左翼が陥った独断である」。③「階

級的憎悪」を煽る悪弊と絶縁すること。著者は「人間への憎悪ではなく、〈友愛〉を基礎にしてこそ、資本主義を克服する社会を創造することができる」と力説する。加えて、著者はソ連邦崩壊の原因解明をマルクス主義の責任として引き受けるべきだという。あの体制は「社会主義とは無縁」だったと逃げてはならないのだ。

「そして社会主義」についてはどうか。本書の冒頭には、一九九一年一〇月四日付『朝日新聞』掲載の著者の投稿「社会主義再生への反省」が再掲されている。ここに、著者のその後の四半世紀に及ぶ〈社会主義〉をめぐる知的営為の原点がある。すなわち「これまでの社会主義の思想と理論のどこに見落としがあったのか」。これを再検討するために、著者はアントン・メンガーはじめ「他人の言説」を十分吸収した。その証拠に巻末の人名索引は五頁にも及ぶ。熟考の結果、著者は上記以外にも様々な創語を行っていく。たとえば、暴力革命に代えて〈則法革命〉を、唯物史観に代えて〈複合史観〉を提唱する。特にメンガーからは、社会変革における法律の重要性を見落としていたと著者は気づかされ、法文化へとその視野を広げる。ロシアに法を尊重する文化はなく、それがロシア革命に「法の精神」を欠如させ、さらには後のソ連社会に負の影響を与えた。「法治国家」への転換が明確に意識されたのは、なんと一九八〇年代のペレストロイカ期になってからである。

以上が本書の太い幹である。一方、著者ならではのディテールの記述も興味深い。『赤旗』では無署名論文のほうが個人署名論文より格上とされていた。いかなる理由なのか。「構造改革派」の略称として「構革派」が一般的だが、共産党や新左翼党派は「構改派」を用いていた。彼らを「改良主義者」として貶めるためである。ゴルバチョフ書記長にどちらが先に面会するかで、不破哲三と土井たか子が先陣争いをした。結局、不破が二日先着した。宮本顕治は著者による共産党批判を「トロ（ツキスト）あがりの観察」と評した。「あがり」という言い方がニクイ。

最終章第IV部の「書評」には、丹羽宇一郎元中国大使の『中国の大問題』（PHP新書）の書評が収められている。アフリカ全体の人口を上回る一四億人を中国共産党は治める。確かに、「統治の規模」の視点は中国を考える上で不可欠だ。

いまや「友愛社会」を目指している著者であるが、本書の中では論争相手への批判には歯に衣着せぬものがある。余計な敵をつくらぬかと余計な心配を

してしまう。しかし重要なのは、「村岡が言った」ではなく「何が言われたか」である。前者の属人思考の払拭を著者は仏教思想家から学んでいる。それが「社会主義へ討論の文化を」育むもう。

*タイトルは編者による。